

# [解答例]

## 国語〔A方式(11/20)〕

設問		解答例
①	問一	① 4
		② 4
		③ 4
		④ 3
	問二	⑤ 2
		⑥ 3
	問三	⑦ 6
		⑧ 5
		⑨ 2
		⑩ 3
	問四	⑪ 3
		⑫ 2
		⑬ 1
	問五	⑭ 5
	問六	⑮ 4
	問七	⑯ 5
	問八	⑰ 1
	問九	⑱ 2
	問十	⑲ 2
②	問一	① 5
		② 6
		③ 2
		④ 6
		⑤ 1
		⑥ 3
		⑦ 4
		⑧ 1
	問二	⑨ 5
		⑩ 3
		⑪ 2
		⑫ 1
	問三	⑬ 2
	問四	⑭ 1
		⑮ 5
		⑯ 2
	問五	⑰ 4
	問六	⑱ 3
	問七	⑲ 1
	問八	⑳ 2
	問九	㉑ 2
		㉒ 3
		㉓ 4
		㉔ 1
		㉕ 1
		㉖ 3
		㉗ 5
		㉘ 4
		㉙ 6

## 国語〔B方式(11/20)〕

設問		解答例
①	問一	① 3
		② 3
		③ 2
		④ 4
		⑤ 5
	問二	⑥ 5
		⑦ 1
		⑧ 3
	問三	⑨ 4
	問四	⑩ 4
	問五	⑪ 1
	問六	⑫ 2
	問七	⑬ 2
	問八	⑭ 5
	問九	⑮ 4
②	問一	① 1
		② 2
		③ 1
		④ 5
		⑤ 3
		⑥ 2
	問二	⑦ 2
		⑧ 3
	問三	⑨ 1
		⑩ 2
	問四	⑪ 2
	問五	⑫ 2
	問六	⑬ 3
	問七	⑭ 5
	問八	⑮ 4
	問九	⑯ 5
		⑰ 1
	問十	⑱ 1
		⑲ 4
		㉑ 3
		㉒ 2

## 国語〔A方式〕

### 国語①

問六 波線部の理由を問う問題。空所Xを含む段落の「自分ではない過去の人々が作り、使い、伝えてきたもの」に「私たちの日々のふるまい」が「依拠している」という点で、「私たち自身が『歴史』を宿した『資料』である」と述べられている。よって、選択肢④が正解。①の「生物学的記憶」や、②の「伝伝的記憶」はともに本文で述べられていない内容。③は「歴史学の研究対象となりうるから」が、⑤は「社会の動きを形成しているから」が、筆者が「(身体的)」という言葉で補足した理由として不適当である。

問七 波線部の内容を問う問題。波線部の前の文に「多様な文献資料の多角的な読解から歴史の実態の解明が進み、『揆嗽詠』と『風水虫書』に終始する農民像は、もはや過去のものと違って良い」ことが述べられている。これが「喜ぶべきこと」の例であるので、この内容を述べた選択肢⑤が正解。①は、「民俗学の研究方法の本質」が、②は「文献史学の進展がなければ解明できない」が、③は「文献の中につぶさに見出すことで」が、④は「民俗学の有用性を際立たせる」が、それぞれ誤り。

問八 波線部について筆者の考えを問う問題。波線部の次の段落で、「歴史」の「読み解き」の例として、柳田國男がカタツムリの呼び名という現象に焦点を当てた例が挙げられている。この段落では、「柳田は、このカタツムリを何と呼ぶか、全国各地の報告を取り集めて検討した結果、「カタツムリ」の方言分布は、京都を中心とした同心円と見なしている」ことを明らかにし、「中心部がより新しく、周辺がより古いという時代差を読み取ることを可能にし、「空間的差異から時間的推移を捉えること」の可能性を示唆したことが述べられている。つまり、特定の現象の変異体の分布傾向から、「歴史の変遷」を読み取れることを示したといえる。また、最後の段落で「民俗資料」に刻み込まれている「歴史」は「単体からは不可視だが、大量の比較を通じて空間差から時間差を抽出することが可能となる」と述べられている。よって、これらの内容に合致する選択肢①が正解。②は「話者の日常生活を描写する」が誤り。③は「同心円状に分布する現象を収集し」が、本文の内容と合致しない。カタツムリの呼び名という現象が「同心円状に分布」していたことは、調査の結果明らかになったことであり、「歴史」を引き出す方法の要件ではない。④は「年長者からの聞き取りをもとに選んでいく」が、⑤は「様々な角度から」「特別な人々の特別な歴史になることを避ける」が、それぞれ誤り。

問十 本文の構成を問う問題。本文では、最初の段落で「民俗学の目的」を明示した後、「時を超えて伝わる資料」について分類を提示し、民俗学は「(身体的)記憶」という資料を特に重視して扱うことを説明している。④は合致する。そして、「記録文書主義の罪」を批判した柳田國男の言葉を引用した後、文字を残せるのは「特別な人々」であったことを説明している。③は合致する。また、こうした文献資料の難点への批判から「多様な文献資料の多角的な読解から歴史の実態の解明が進んだ例を挙げているので、⑤は合致する。さらに、「私たち」を「無数のアプリをインストールされたスマホのようなもの」という意外な比喻を用いて説明した後、柳田國男の『蝸牛考』を紹介し、民俗学がどのように歴史を読み解くかを明らかにしている。①は合致する。②は「本質的に適切な特徴を備えているはずの」が、本文の空所6を含む段落で、「文字資料」は「一側面に過ぎず、その全体像ではない」と述べられていることと合致しない。よって、選択肢②が正解。

### 国語②

問五 波線部の内容を問う問題。波線部の「えもいはず」「えもいはず(言いようのないくらい見事だ)」の連体形で「菊」を修飾している。また「そこばく(たくさん)」とあるので、選択肢④が正解。

問六 登場人物の心情の読み取りを問う問題。波線部の前で、仙人は客(淮南王劉安)に対して「さては、汝、この所に縁あるにこそありけれ。ここは仙宮なり。(さては、あなたは、この場所に縁があったのだなあ。ここは仙宮だ。)」と言っている。また、波線部に「しかるべし(望むところである)」「かりそめ

に(ちよっと思い立ち)」「おほつかなし(気がかりである)」とある。つまり、客は「(仙宮)にとどまることになるのは望むところではあるが、ちよっと思い立ち出てきたふる里のことも気がかりである」という思いを述べているのである。よって、選択肢③が正解。

問八 本文の内容の読み取りを問う問題。波線部の前で、淮南王劉安は「わが家は、跡かたなくなりてうせたり。(わが家が跡かたなく消え失せていた。)」という光景を見て老翁に「このよし(物事のいきさつ)を尋ねている。よって、老翁が答えた「さること」は淮南王劉安の家が消え失せた理由を説明する内容である。また、波線部の後に「われらが七世のおほちの代にこそ承り及べれ。(わたしたちの七世代前のじいさんの代にお聞きした)」とある。仙人が、淮南王劉安が仙宮に着いたときには「すでに一千歳をへたり(すでに千年たった)」と述べていたこともふまえると、淮南王劉安が行方不明になつてから長い年月が経つたので、その家が消え失せてしまったと考えられる。よって、老翁が述べる「さること」としては「淮南王劉安という人物がこの里に住んでいたが、ある日突然行方不明になつてしまった」という内容が適当であり、選択肢②が正解。

問九 (一)空所補充問題。①和歌の背景を述べたものを「詞書」というので、選択肢②が正解。②[A]の和歌には「いつか千歳を我はへにけむ(いつのまにか千年を送ったのだろうか)」とある。また、[B]で、仙人が、淮南王劉安が仙宮に着いたときには「すでに一千歳をへたり(すでに千年たった)」と述べていたこともふまえると、素性法師は和歌を淮南王劉安に「なりきつて詠んだことがわかるので、選択肢③が正解。③[B]で「この歌の心(この和歌の意味)」の中に「山路の菊の露にぬれたる袖の、ほすほどいまだなきひまに(山道で菊の露で濡れた袖が乾く間もなく)」とあるので、「つゆ」は「露」と「くわずかの間」という二つの意味をもたせているので、選択肢④が正解。④[A]の和歌の「つゆ」のように一語に二つの意味をもたせる修辭法を「掛詞」というので、選択肢①が正解。⑤空所の次の文に「その裏付けとして、素性法師が若々しい姿で藤原家隆の前に現れて、『我は仙人なり今も仙郷にあり』と言った、という話を挙げている」とある。つまり、[C]では、素性法師が仙人であり、千年を送つたのは素性法師自身の「体験」であると解釈している。選択肢①が正解。⑥「古今和歌集」が成立したのは九〇五年、『新古今和歌集』が成立したのは一二〇五年なので、選択肢③が正解。⑦「新古今和歌集」を藤原家隆とともに撰集したのは藤原定家なので、選択肢⑤が正解。⑧陰暦の九月九日を重陽の節句または菊の節句といひ、奈良時代以降の日本では宮中で菊の宴が催されたよって、選択肢④が正解。

(二)漢文の「令」は使役を意味し、「ラシテ(シム)に(く)させる」と読む。よって、使役の対象である「人」に「をして」を続けて読んでいる選択肢⑥が正解。

国語〔B方式〕

国語①

問六 傍線部の前後の文脈を読み取る問題。傍線部の前では「豆腐」という和食の食材。傍線部の後では「和食を育む自然が誕生した地質学的な背景」について述べており、話題が転換している。また、傍線部の後の「和食の本質に迫るには、特色ある食材がどのような自然によって育まれたのかをきちんと理解する必要がある」という部分から、転換する前の話題をふまえた主張になっていることがわかるので、選択肢②が正解。①・③・④・⑤はいずれも本文の展開に合うものでないため、誤り。

問七 傍線部の内容を読み取る問題。傍線部の後で「瀬戸内海には、高速潮流の瀬戸(海峡)と、比較的海が広がり穏やかな灘が交互に配置している。瀬戸では潮流が鯛や鯖を育み、灘は泥質の海底に穴子や鰻が暮らす」と述べている。よって、この内容をまとめた選択肢②が正解。①は「自然災害が比較的少なく一神教が信じられるようになった地帯」が、③は「日本からはるかに離れているフィリピン海プレート」が、④は「淡路島・六甲山地という沈降域と大阪湾という隆起域」が、それぞれ誤り。⑤は、本文にそのような記述はないので誤り。

問八 傍線部の内容を読み取る問題。傍線部の「地球科学者」が、「気になること」として、「直近ではわずか七三〇〇年前」に発生した超巨大噴火を挙げており、「今後の一〇〇年間にパーセントという、決して安心できない確率」と述べていることから、選択肢⑤が正解。①は、本文にそのような記述はないので誤り。②は「その差をも過大評価しない」が、③は「悠久のように感じて」が、④は「ほんの短い時間と錯覚しがちな」が、それぞれ誤り。

問九 本文の要旨を問う問題。④は本文の「私たちは、海の穀倉地帯と呼ばれるほどに豊かな瀬戸内海の恩恵に浴す一方で、直下型地震という試練も与えられている」や、「日本列島では当たり前のように発生するこのカタストロフは、現状のままでは日本喪失も引き起こしかねない」という内容と合致する。また、最後の段落の「変動帯の民は、荒ぶる日本列島に暮らしながら和食文化を培ってきた。私たちも和食をいただける有り難さを噛みしめながら、この日本列島からの恩恵を、子々孫々も享受できるようにしよう」という内容を強かに考えたいものだ。これが私たちの世代の責任ではなからうか」という内容にも合致する。よって、これらの内容をまとめた選択肢④が正解。①は「地殻変動によって生まれた瀬戸内海の豊富な海産物が有効」が、②は「地質学をもあわせて理解しなければならぬ」が、③は「進んだ食材加工技術をも取り入れてゆくべき」が、⑤は「和食がオンリーワンであることを認識できなくなってしまう」が、それぞれ誤り。

国語②

問五 傍線部の内容を問う問題。傍線部は「御曹司」が「弁慶が姿を御覧じ」た感想を述べた台詞の最後の部分であることから、傍線部以前の「御曹司」の台詞や「弁慶」の様子が描写されている箇所を手掛かりとして選択肢を検討する。①は本文の「それも人間の者なれば、かほどに色黒く、背高くはよもあらじ」それでも人間であれば、よもやこれほどまでに色黒く、背が高いはずはあるまい」に合致する。②は本文に「西塔の武蔵坊弁慶とて、日本一のをこの者ありと聞きしが(西塔の武蔵坊弁慶とて、日本一おろかな者がいると聞いたが)」とあるものの、「鬼である」とは言われていないので、本文の内容に合致しない。③は本文の「愛宕、比良の天狗は我に慣れたれば、大概見知りて覚ゆるなり(愛宕、比良の天狗は私に慣れているから、大概顔を見知って覚えていて)」に合致する。④は本文の「ものけしからずのありさまや(ことごとく怪しげな様子だなあ)」と合致する。⑤は本文の「八尺余りの八角棒、左右に石突をすげさせ、ところどころに金杭を打たせ、中の手だまりをば琴の糸にてみしと巻き、弓手の小脇にかいこうで、神前の広庭に仁王立ちにぞ立ちたりける(八尺余りの長さの八角棒を、左右に石突を取り付け、随所に金杭を打たせて、中の持ち手を琴の弦でしっかりと巻いて、左手の脇に抱えて、

神社の広い庭で仁王立ちしていた)」に合致する。適当でないものを選ぶので、選択肢②が正解。

問六 傍線部の解釈を問う問題。「よしは、しばしば」も等々を伴って「たとえ」の意味を表すので、「よし何にても」は「たとえ何であっても」という意味になる。残りの「あらはあれの「あらは」は、「あり」の未然形+ば」の形で順接の仮定条件「もしくならば」という意味になり、「あれ」は「あり」の命令形であるので、「(そうであるならば)あれ、すなわち」どうとでもなるがよい、「なるようになれ」といった意味になる。よって、選択肢③が正解。

問七 傍線部の内容を問う問題。傍線部の前では「御曹司」と「弁慶」の戦闘が描かれており、「御曹司」が「何の宿意ぞ、御坊よ。出家の姿なれば、命をば助くるぞ。はや罷り退け(私に何の恨みがあるのか、御坊よ。出家した姿であるから、命だけは助けよう。速やかに退散しろ)」と「弁慶」を牽制したことに対して、「弁慶」が「安からず思ひて(穏やかな気持ちでなくなつて)」放つた言葉が傍線部を含む台詞といふことになる。また、次の段落に「半時がほどこそ戦ひけれ(一時間ほど戦つた)」とあるので、傍線部の後も戦闘が継続したことがわかる。よって、傍線部を含む台詞は更なる戦闘へと発展するような台詞であるので、選択肢⑤が正解。

問八 傍線部の内容を問う問題。傍線部の後、逆接の「が」に続いて、「弁慶は」多くの者に会ひたれどもこれほどに程なく、目算にも及ばず、負けたことはいまだなし(今まで多くの者に出会ったけれどもこれほどに短時間で、(勝つための)もくろみさえ立たず、負けたことはいまだない)」と、「御曹司」に完敗を喫したことを振り返り、「腹立ちさよ(腹の立つことだ)」とつぶやいている。つまり、「返事もせざりし(返事もしなかった)」間は負けを認められず、戦いを振り返る中で「御曹司」の実力を認めざるを得ないことを悔しがっていたということである。よって、選択肢④が正解。①の「太刀を取り上げるといふ非道な行い」は本文中に言及がないので誤り。②の「相手を油断させようとした」は、傍線部の後の「我が物なれば惜しきなり。賜ひ給へ(私の物なので惜しい。お与えください)」という返事の裏にある「今の遺恨を散ぜむ(今の遺恨を解消しよう)」という意図であり、「返事もせざりし」理由としては誤り。③は「目がくらんで」いた描写はあるが、それによって「言葉が出なくなっていた」という描写がないので誤り。⑤は「太刀を取られた原因を考えていた」が誤り。